

けいせんびと 話題の人・団体



土師の獅子舞「楽」(上土師)

おおつかよしえ 大塚佳恵さん
おおつかみき 大塚美樹さん
たかやまあすか 高山飛鳥さん
いいたかほ 飯田華帆さん

「楽」とは、祭事において太鼓や笛を鳴らす役目のことで、土師地区では、大太鼓・小太鼓・笛・かねに分かれる。今回は、上土師地区に14人いる楽の中で、笛の吹き手である4人の若者に話を聞いた。

始めに、楽を始めたきっかけについて尋ねると、4人揃って答えに困った顔をする。「楽をやるのが自然の流れだったので、きっかけというものはないですね」と話すのは大学生の大塚佳恵さん。老松神社の祭典では、獅子舞の奉納の他、子どもたちによる太鼓の廻り打ちも行われる。上土師地区の子どもたちは、小学生までは太鼓の廻り打ちを行い、中学生から「杖つかい」や「楽」を始めることが多く、幼少の頃から

県無形民俗文化財 土師の獅子舞「楽」

“気負わない” 伝統を受け継ぐ 次の世代を担う若者たち

少子高齢化の進行により、地域の伝統文化の担い手減少が全国的に課題となっている。土師老松神社で奉納される「土師の獅子舞」で「楽」として活躍する上土師地区の若者に話を聞いた。



▲祭りの際は白装束を身にまとして演奏。
▼練習は基本的に夜。学校や仕事が終わってから、公民館などで行う。

ら地域の伝統文化が体に自然と染み付いているようだ。しかし、それが嫌だと思ったことは一度もないと4人は口を揃える。中学2年生の飯田華帆さんが「楽をずっとやりたかった」と話すと、中学1年生の大塚美樹さんは「肺活量があがった。口が筋肉痛になるけど」と笑顔を見せる。

◇ ◇

練習は年間を通して行われ、通常は週2回、祭り前になると毎日のように笛の腕を磨く。

驚いたのは、彼女たちが吹く笛には、決められた楽譜がないということだ。「指の動きだけを覚えて演奏しています」と話すのは高山飛鳥さん。「他の笛の人の指を見てたら吹けてた」「楽譜がないから人によって吹き方が違うかも?」と、笑い合う4人。地域の隅々まで響くような高らかに



な笛の音色は、日々の練習と幼少時からの経験の賜物なのだ。

◇ ◇

最後に、地域の伝統文化を受け継ぐ担い手としての想いを尋ねてみると、最初の質問と同じような、返事に困ったという反応が返ってくる。

「伝統とか、そういったことを意識したことはあまりないですね」と、やや間があって答えた高山さん。「たぶん、意識したことがないからこそやっていけるんだと思います。意識すると重荷になっちゃいますから」

その言葉に頷く彼女たちに伝統への気負いは感じられない。しかし、この地域に受け継がれる伝統の心は自然な形で彼女たちに根付いている。その心こそが伝統文化「土師の獅子舞」を支える原動力になっているに違いない。